

大江一族

中世名張の開拓者

院政期に入ると黒田荘の領主東大寺は、伊賀国衙や在庁官人らとの熾烈な抗争を経て、名張盆地一帯の寺領化に成功します。東大寺が荘園支配を強化する中で、現地でそれを支えながらも次第に実力を蓄え、名張の中世史を切り開いていった武士団が大江氏一族でした。

名張盆地では、激動の時代であった院政期から源平内乱期にかけて、名張郡司の名族源(文部)氏、平氏の郎党となった紀氏、源氏に従い御家人となった平氏らの武士団が叢生していました。もと在庁官人出身の大江氏は、他の武士団と争いを繰り返しながら、ついには名張盆地に根を下ろした有力在地領主に成長し、鎌倉時代の中頃には東大寺の支配さえ退けるほどの力を付けていきました。研究史上著名な黒田悪党の主勢力は彼ら大江氏でありました。

彼らの本拠地は、黒田本荘内で、名張川左岸の安定した丘陵地と若干の平地からなる大屋戸であったようです。伝承では、清和天皇の皇子で伊賀国を支配した貞基親王の子孫が大江を名乗ったといい、その氏神が大屋戸の杉谷社でありました。また大屋戸には大江寺跡がありますが、その名の通り、彼らの氏寺

であったのでしょう。杉谷社・大江寺の氏寺・氏寺は、建保二年(一一二四)の寺領注文では、本荘内の神社の中でも最も広い料田を有しており、在地にしめる大江一族の存在の大きさが知られます。

大江一族が他の武士団を追い落とし生き残っていた背景には、荘園領主東大寺との密接な関係が考えられます。大江氏が史上初めて姿を現したのは、長承二年(一一三三)の東大寺東南院覚樹領田畠立券状に「下司散位大江朝臣」と見えるもので、これ以降、大江氏は現地荘官の最高責任者たる下司に代々任じられます。後の史料から、下司職は、初代直定、貞成、則高、貞次(定継)、清定、泰定などと鎌倉末期に至るまで大江氏が代々世襲したことがわかり、東大寺にとっても大江氏は無くてはならない現地有力者であったことは間違いありません。

すでに平安時代末期、大江貞成は「譜代御荘官」・「御荘威猛第一之者」と称されるまじりになります。元暦元年(一一八四)、大江良直なる人物が、かの源俊方と合戦に及び、俊方を没落させるきっかけを作るなど、大江氏は他の競合者から一歩一歩抜きん出たのです。さらにまた、東大寺は、一円の寺

- 1 応徳三年(一〇八六)白河上皇による院政から本格化以後、鳥羽、後白河と三代続き、この時代を院政期と呼ぶ。
- 2 平安中期以降、各国の国衙で行政事務を担当した役人。
- 3 注進状、土地の状況、その他を調査し、その明細を注記して具申する文書。
- 4 征伐すること。



大屋戸付近

領の内に他の勢力と結びつく人々が存在することを許さず、そうした武士団を壊滅する政策をとっていましたから、幕府御家人となった平氏や服部氏は、東大寺によって勢力を減じ、それがまた譜代の荘官大江氏の力を増大させる結果となりました。大江氏の所領は、先の建保注文に下司給田一町などが見えますが、延成名ほかの私領を有していたことが知られています。大江氏はこの名田を代官や下人を使つて管理させていましたが、現地住人を支配する領主としての姿が見えることは注目されます。鎌倉時代の中頃、寛元元年(一二四三)の文書を見ると、黒田荘の荘官組織の内、下司・総追捕使・公文(通称して三職という)を、大江氏が独占しています。いわば現地側の総責任者、警察官、事務官を一族で押さえていたのです。東大寺は大江氏を通して、また大江氏は東大寺を背景に、それぞれ荘園領主、在地領主の立場から黒田荘支配を進めていったといつてよいでしょう。

しかし、鎌倉時代の後半に至ると、両者の相互補完的な関係に綻びが見え始めます。建長元年(一二四九)には、大江一族の定直法師という人物が鎌倉幕府の御家人となったという理由で、東大寺の総意によって黒田荘が

ら追放され、住宅を焼き払われ、私領田畠を没官されるといふ重罰を与えられていますが、そんな治罰に臆することなく、定直は再び黒田荘に帰住して舎屋を構え、土民を脅かしたといえます。加えて東大寺にとつて許し難かつたのは、定直が鎌倉幕府の法廷で東大寺と対等の立場で訴訟をしようとしたことでした。東大寺からすれば、定直は寺の法廷で裁かれるべき、東大寺配下の「荘番」にすぎなかつたのです。実力を蓄え始めた大江一族の中には、こうした力関係を逆転しようとする動きをはじめたものが出てきたのです。その動きは、後に「黒田悪党」となつて現れ、名張盆地が歩む方向を大きく転換させる力となりました。

翻つてみれば、名張盆地随一の軍事勢力に育て上げたのは、他ならぬ荘園領主東大寺であったともいえます。こうして黒田荘は再び激動の時代に突入していくのです。

(横内 裕人)